

豊漁を呼ぶフナダマ——〈漁運〉の獲得と御神体——

徳丸 亞木

豊漁を呼ぶフナダマ―〈漁運〉の獲得と御神体―

徳丸 亞木

目次

はじめに―フナダマの類型について―

第一章 鹿児島南さつま市坊津町のフナダマ信仰―少女とフナダマサマ―

第一節 坊津町の鰹漁と漁の経験

第二節 フナダマサマと少女

第三節 坊津町における〈漁運〉の諸相

小括

第二章 長崎県天草市牛深町加世浦のフナダマ信仰―男女児童とフナダンサン―

第一節 加世浦の鰹漁と出稼ぎ漁

第二節 フナダンサンと男女児童

第三節 加瀬浦における〈漁運〉の諸相

第四節 〈イサミ〉・フナタデの伝承とフナダンサンの〈去来〉伝承

小括

第三章 福島県いわき市久之浜のフナダマ信仰―妊婦とオフナダサマ―

第一節 久之浜の一本釣・延縄・ホッキ貝漁

第二節 漁撈と妻の役割

第三節 オフナダサマと妊婦

第四節 久之浜における〈漁運〉の諸相

小括

おわりに―フナダマ信仰に見る〈漁運〉の意識―

はじめに―フナダマの類型について―

本研究ノートは、漁民信仰のうち、特に、フナダマ信仰（船に宿るとされる神霊に対する信仰）に焦点を定め、調査対象漁村における実態と、関連する漁撈習俗を報告するとともに、主に、豊漁を招くとする女性の霊性（霊的な性質）を漁民の〈漁運^{つき}〉（漁獲を左右すると信じられている運）の観念との関連から若干の分析を行うことを目的とする。

筆者は、一九九六年に本誌に発表したフナダマ信仰に関する研究論文「漁民信仰論序説―フナダマ信仰を中心にして―」^①において、日本のフナダマ信仰の地域的特性を、毛髪、男女の人形、サイコロなどフナダマの御神体の展開から明らかにした。あわせて、漁民のフナダマ信仰と船を構築する船大工の保持するフナダマ信仰の差異、女性のケガレ観・霊性とフナダマ信仰の関連、鰹漁など遠海出漁を行う漁民におけるフナダマ信仰、フナダマが船上で神秘的な音を立てるとする（イサミ）伝承、フナタデの際のフナダマの船と陸との間の去来などについて考察し、日本のフナダマ信仰に関して以下の三類型を提示し、それぞれがある程度の地域性を持つて展開することを論じた。

①、初潮前の少女の霊性に豊漁を期待し、その毛髪をフナダマの神体とする

〈霊性型^{れいせい}〉 フナダマ信仰（薩南沿岸、伊豆諸島、三陸沿岸部に顕著）

②、フナダマが船上などで神秘的な音響を立て漁民にその意志を伝えるとする

〔精霊型〕フナダマ信仰（瀬戸内海沿岸部、豊後水道沿岸部に顕著）

③、陸の社寺の神札をフナダマの御神体とする

〔社寺型〕フナダマ信仰（日本海沿岸部に顕著）

この時点では、これらの類型が地域的に分かれて展開する理由を明らかにできなかったが、その後、鹿児島南さつま市（旧川辺郡）坊津町における鰹漁で遠海に出漁する漁民を対象としたフィールドワークにより、特に〔霊性型〕フナダマ信仰について言えば、高桑守史の言う漁民集団類型^三に対応する形で、遠洋に獲物を追う釣・縄漁民集団タイプの漁民集団における特定の船を中心とした漁撈活動や、他船と漁獲を競う競合的な気質、あるいは船頭を中心とした船内部の社会関係と、この信仰形態が関連している可能性を指摘した^{三〇}。

また、山口県下関市矢玉浦における民俗調査を通じて、東シナ海など遠海に出漁し延縄漁を行う釣・縄漁民と、地先近海で棒受網漁を行う網漁民、および大規模定置網である大敷網を経営する網漁民、そして潜水漁に従事した経験を有する漁民四者の生活史とフナダマ信仰をはじめとする漁民信仰のあり方を比較検討することにより、一浦の中で、漁民が従事する漁撈形態による漁民信仰の差異について検討を試み、その活動する海域により、海への心性にも差異が認められる可能性を指摘した^{四〇}。

本稿においては、まず、初潮前の少女の霊性に豊漁を招く力を期待する顕著な例として鹿児島県南さつま市坊津町の事例を話者の語りに即して今一度、詳細に報告し、〔漁運〕に対する心意を検討する。続いて、同じく初潮を迎える前の少女の毛髪を男児の毛髪とセットで納める熊本県天草市牛深町加瀬浦の事例と、妊婦の毛髪を納める福島県いわき市久之浜の事例を検討し、漁民の〔漁運〕に対する意識とフナダマ信仰との関連を具体的な調査事例に基づいて考察を試みる。

鹿児島県南さつま市坊津町は、薩摩半島南端に位置し、本稿での話者が語る戦後から昭和四十年代にかけては、内陸の常畑を耕作する農家と、遠洋における鰹一本釣漁や、沿岸における鯛、キビナゴ、シイラなどの網漁に従事する專業漁家から構成されていた。坊津町においては本来、沿岸漁業を基本としており、鰹漁は、藩政期享保年間に四軒の船主から始まったとされる。同町では、天保、安政期に地先海域における鰹漁の最盛期を迎える。その後、明治十年代の不漁により、一時衰退傾向にあったが、明治末年から大正期にかけての発動機船の普及により、沖合で

の鰹漁が可能となり、この時点で坊津町の鰹漁漁民は、漁場を大幅に拡大し、遠海への出漁漁民としての性格を強めたものと思われる。鰹漁が盛んであった時期には三月期から十二月期までを漁期とし、鰹の移動を追って三陸沖まで出漁した。この地域では、初潮を迎える前の少女に豊漁を期待して、その毛髪や彼女が製作した人形をフナダマの御神体とする〈靈性型〉フナダマ信仰を顕著に見ることができる。

熊本県天草市の牛深港は、調査時点（一九八六年）では、六軒の鰹船の親方のみが、それぞれ十四、十五名のフナト（船子）を抱えて鰹船を経営している状態であったが、かつては鰹漁の基地であり、高知県を母村とする土佐船団は、宮崎・枕崎・坊津経由で牛深港に帰港し、更に、五島列島を経て下関方面まで北上した。また、宮崎の鰹船も五島列島方面に出漁の際に、牛深港に帰港していた。藩政期には、島原の貿易商人や、大阪の海産物問屋の船も多く入港し、干あわび、トサカ、テングサなどの取引も活発であった。その様な船乗りたちを相手にするため、新銀取扱と呼ばれる遊女の置屋街には、新銀が鑄造されると三月もたたない間に行き渡ったとも言われており、牛深港は当時より交易の結節点でもあった。調査の対象とした牛深町加世浦では、調査時点までに、鰹一本釣漁、鰹引網漁、鰹垣網漁、鰹刺網漁、イカ・鰹・ヨコハシリなどの夫婦一本釣漁、飛魚刺網漁などの漁法が受け入れられた。加瀬浦の鰹一本釣の技術も土佐から伝えられたと伝承されている。この地域では、フナダマが神秘的な音響を発するとする〈イサミ〉伝承が聞かれるが、同時にここは男女児童の毛髪をフナダマの御神体とする傾向が見られる地域でもある。

いわき市久之浜は、調査時点（二〇〇四年）ではホッキ貝漁など底物を近海で狙う漁業が盛んな地域であったが、かつては専業漁家による沖合での鰹一本釣漁が行われており、また戦後の一時期、外部資本による大敷網経営が営まれた漁村である。フナダマ信仰の類型からは、特に御神体として妊婦の毛髪を用いる傾向が顕著に見られる地域であり、妊婦の毛髪が豊漁を招くという觀念が示される地域でもある。

本稿では、各地区別に漁撈やフナダマ信仰について報告を行うが、各々の報告は、限られた話者への聞き書きに基づくものであり、地域のフナダマを悉皆的・網羅的に調査したものではない。しかしながら、フナダマ信仰を保持する伝承主体とそのものを重視する報告者の立場から、特定の話者の語りに表現されるフナダマや〈漁運〉に関する考え方とその背景からも一定の分析は可能と考える。調査資料の殆どは筆記記録と録音に基づくが、牛深町加瀬浦の報告は、筆記記録のみに基づく。

最後に、いわき市久之浜は先の東日本大震災において、甚大な被害を受けたが、地域の方々が育み伝えて来た民俗文化を記録し、残すことも本稿の目的の一つとしたい。

第一章 鹿児島県南さつま市坊津町のフナダマ信仰―少女とフナダマサマ―

まず最初に、フナダマ信仰と少女の霊性が強く結びつく鹿児島県南さつま市坊津町の事例を取り上げる。本報告の話者は、昭和二年、坊津町で出生した男性である。船主船頭の経験者であり、聞き書き当時、坊津町町長を務めておられた。鰹船に初めて乗ったのは、終戦直後であり、その後、船員、船長を経て船頭に昇格し、昭和四十六年に船を離れ陸にあがった。本章では、話者のフナダマに対する認識を明確化するためにその語りに即して報告を行う。

第一節 坊津町の鰹漁と漁の経験

《鰹船に乗る経緯》私の親は鰹船の船乗りだったが、親自身もこんな辛い船乗りなどにはなるなと言っていた。私は裁判所の書記官になりたかった。それならばということ、高校の校長が弁護士職の紹介してくれた。そこで、掃除や、訴状の複写など、色々下働きしながら、勉強をさせてもらった。二年ほど後に、シナ事変が勃発した。私も四十五連隊の人たちが駅から出征したのを覚えている。二、三年の修行のあと東京に出たが、一年後には、もう兵役となった。昭和十六年の九月に入隊して、昭和二十年の十二月に復員し家に帰った。

私の同僚は殆どが漁業通信士を目指していたが、彼らは熊本電波学校か、東京目黒電波学校、海員養成所に入校し、三級無線通信士になるのがあこがれだった。しかし、戦争でそのまま船に徴用されて死んだ者が多い。

私は最初に船に乗るまでは漁の経験は無く、船に乗りうとも思わなかった。しかし、終戦で仕事が全く無く、また、ちようどそのころ、徴用されていた鰹船の生き残りがそれぞれの持ち主に戻って来た。船さえあれば、もともと坊津漁民には鰹漁のスジ（伝統）があるため、鰹漁は直ちに復活し、私も、兄が親の仕事を継いで、鰹漁の船長を務めていたので、その伝で船に昭和二十二年に乗った。乗ったらヒラガコ（一般船員）ではつまらないと友達同士で話す機会も多く、一番近道は機関長か船長になるかだったので、集まって勉強し一年がかりで海技免状をとり、その一年後には船長として働いた。

《戦後の鰹漁》当時は、専門の船というよりも船でさえあれば、とにかく沖にさえ行ければ、どのような船でも良かった。鰹漁が一つの産業

として成り立って来たのは昭和二十五、六年くらいからのことで、当時、二十七、八隻、百五十トンから十九トンまでの鰹船があった。それぞれ、とにかく船を探して使った。

昭和二十一年には三十一隻になって、二十三年には三十八隻と増加する。殆どは九十九トン以下で、平均四十五、六トン。昭和三十年になると三十八隻になって鰹漁が盛んになって行く。

鰹船は非常に盛衰があつて、漁が無いと船員はその船に乗らない。優秀な船頭がいないと船員は集まらない。船も成り立たない。昭和三十年代から高度経済成長で、鰹漁も遠洋漁業として定着してきた。労働組合の様な組織もできて収入の最低保障なども行われるようになってきた。それに応じて船員の生活も安定してきて、産業として推進されてきた。私は一番小さいので九十九トン、百トン型に乗船していた。百トンになると乗組員の国家免許が高度なものになるので、学歴の無い者はとれなかった。昭和三十一年には三百トン型に乗り、南洋のセレベスあたりまで出た。三十二年で三百トンは静岡県清水市の船主に売られ、それ以降は百五十トンの船に乗り、昭和四十六年まで続けた。それから陸にあがった。最初の船の名前は第二十三太陽丸、N氏が船主で、氏は、当時の鹿児島県海運業の勇であり、石油タンカーも経営しつつ鰹船もやっていた。鰹船には五十五、六人乗っていた。陸にいて畑を開墾するより鰹漁の方が収益が高かった。

〔坊津の鰹漁経営〕鰹船は経営上の船主の浮沈もあつて盛衰が激しかった。鰹が一度でも獲れないと、借金をしなければ次の漁の仕込みができない。餌や食料や石油やもろもろを積み込むお金が、どうしても必要となる。何航海も鰹が捕れないと、借金が嵩んで、誰も貸してくれなくなり、出漁もできなくなる。そういう零細な状況だった。大資本の鰹業者が入ってくると、そのような零細な船主はひとたまりもない。私の乗った船の船主は大きな船の船主であつたからその点は大丈夫だった。

私が鰹船に初めて乗った当時は、給与制ではなく、歩合制の配当金だったから一年間の漁獲高から経費分を差し引いて、半分は船主が、残った半分を船員達でそれぞれの割合で分けて行つた。歩合は、平カコ（普通船員）が一とするならば、船長、機関長は一・五、船の飯炊きであるカシキは〇・五、そして船頭は二の割合だった。一艘の船で五十名から五十五名位は船員がいるから、定給という訳にはいかなかった。占領軍司令部による労働組合組織化の後押しもあつて、戦後間もなく漁民組合を作つて生活補償金制度を作った。しかし、固定給にしたことで、鰹船船主の経営体質が弱まって行つた。漁が悪い時にも船主は一定の給与を船員達に払わねばならず、経営を圧迫して坊津の船主は次々と倒産していった。そのころの船主は、家や屋敷を抵当に入れて、親方や銀行からお金を借りて、鰹船を買い、一攫千金で金儲けをしようという者が多かつ

た。儲かる時には儲かるが、赤字になったら、資金を親方から借り、そのために、家屋敷を担保にして、結果として不漁が続いて借金が返せなければ、家屋敷まで無くなってしまふ。釣れば一攫千金だが、釣れねば丸裸で、船主になった者は、暫くは良くとも、その殆どが、やがては家屋敷を失っている。その当時、一早く株式会社制度をとった船主だけが、何とか家屋敷を失わずにすんだ。そうでない零細な船主は家屋敷の下で土まで銀行や親方に取られてしまつて、四散してしまつてゐる。坊津の船主の気性は裸一貫でやつてやろうという気概あるものだったが、失敗する者が多かった。自己資本だけで鰹船を買つて漁を行へた者は殆どいなかった。二、三年当たらないとそれで倒産した。鰹漁業は不安定であるから、自己資本を持つてゐる者は、それがわかつていて投資しなかつた。だから鰹船で儲けたら陸にあがつて勉強して、サラリーマンになろうという者も出た。進歩的な親は子供の将来をそう考えた。

鰹船船員は今五千三百名くらいだが、昔は一万四千名ほどいた。しかし考えてみるとあまりにも当時は多すぎた。耕地も、水もない所で、小さな鰹船に五十名も乗つて、ホントに狭い家に七、八名も住んでいた（後略）。

《船頭の役割》私が船頭として働いたのは、最初に鰹船に乗つて八年ほど経つた時で、昭和三十年十二月に船頭になったのは昭和二十四年で、船長は、勉強して国家試験を受けてなれる。船頭は、その船の支配人的な存在だが、鰹漁の場合も、船頭（漁撈長）が船の中心での本当の実権を握つてゐる。普通、船長をやつて五、六年して船頭になれる。漁に対する才覚、船の操船、航海、六分儀と時計一つで昔は大海を航海をしていた。今は衛星があるが、昔はそれだけで赤道を越えて漁に行つてゐたのだから、航海術に長けている必要があつた。船主としても大變な財産を預けてゐるのだから、船頭の腕は一番重要視された。台風なども避けて航海しなくてはならないから、そうした知識も要求される。船頭の腕を見込んでこの人ならばと見極めて大切な財産を預ける。しかも魚をできるだけ獲つて来てもらわなくてはならない、難しい仕事である。今は機械で船の位置や台風的位置は判るが、我々の頃は、全然そんなことが判らなかつた。無線の情報など、せいぜいそれを頼りにしながら、この月には台風がどの方向に移動するなど、そういう法則まで理解できていなくてはならない。この台風はどの様な曲線を描いて流れて行くか、その特性を見きわめて、逃げる方向などを考えた。その計画が当たらなければ、大遭難が起こる。伊豆の焼津の湊とか御前崎とかあのあたりの新造船が小笠原諸島で一夜のうちに大遭難して沈没したこともあつた。これも、やはりちよつとした判断のミスだ。船頭の才覚が総てを左右する。

《時化の体験と運》もう一つは運である。私なんかは運が良かった。思い切つた決断がうまく行つた。運が悪い人はこう逃げたら良いと思つ

て逃げた方向に台風がぶち当たってしまう。それが、確かにあった。実質船頭を十三年ほど務めたが人間を一人も殺すことがなかった。その点、私は運が本当に良かった。沢山の名船頭が坊津にもいるが、名船頭であっても沢山の船員を事故死させたりしている。鰹を釣る時に海に落ちて行方不明になったり、台風の遭難にあつて逃げ切れず亡くなったり、船ごと沈没したりすることが非常に多かった。私は陸にあがるまで二十五、六年船頭をしたけれども、そういう事故に遭わずにすんだ。船の責任者は、やっぱりそのような経験に遭うと惨めだし、終生忘れることができない。そういうふうに通というものに感謝する。今の時代は、神様などということはありませんが、我々はそういう神様を含めたなにかの力があるんだ、という気持ちがある。時化の真っ直中に放り込まれた時、神様、仏様でも、もうそれしかない。そうして、嵐が過ぎるのをひたすら耐える。無線も入らない、太陽は出ないから位置はわからない。ただ、船を波や風に横にするとすぐ沈没してしまう、こっちら、嵐が来たらこっちに、こっちらならこっちにと、嵐や波に対して船を立て、一晩でも二晩でも鰹船を船頭は責任をもつてやった。乗組員はなにもできずに船室で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」、「神様、仏様」と祈っているだけの立場になってしまう。嵐が過ぎるまでの時間を耐えきれなくて、気の弱い者は発狂したり、自分で裸になって海に飛び込むというのもあった。しかし、私が終戦後に乗った船は、藩政時代の船などからすると、まだまだ恵まれていて、ある程度の装備ができた時代だった。まだ鉄船ではなくて木造船だったが、良い船主に恵まれると鉄船の良い船に乗ることができた。日本の工業化が本格的になった頃から鉄船に切り替わってきて、そのころの感覚としては、鉄で浮くのか、鰹を釣りに行けるのか、むしろ鉄船は怖いという感覚だった。枕崎市でも何隻かは作っていたが、多くは静岡県清水に注文して作っていた。

以上の様に話者は船主船頭として鰹船を所有、経営し、船上での漁撈活動を経験したが、その語りでは海上において自然の力が如何に強大であり、人の力が及ばないものであることを強調した。また、自身の人生についても運の良さを強調する。漁撈活動において運が重要な意味を持つとする認識は、フナダマサマのご神体とされる毛髪提供者の選択に際しても聞かれる。

第二節 フナダマサマと少女

〈フナダマサマ〉フナダマサマは必ず祀っていた。船頭になって、新しく船に乗ることになると、前祀っていたフナダマサマは焼いて海に流

して、今度は自分の信じられるフナダマサマを船大工に頼んで納めた。それが、新船頭が一番先にやるべき行事であった。船頭が変わるたびにフナダマサマの御神体を入れ替えた。ご神体は、昔、鯉船にブリッジが無かったころは、帆柱の下のに穴を掘ってそこに神様を入れて木の蓋をしていた。私が船頭をしたころは、船長・船頭が寝る寝室をかねた、一段と高い操舵室に神棚があつてそこに納めていた。新しく船頭になると、まず古いご神体を下げて、新しいものを納めた。

御神体は、主に、その船頭が家庭を見て、家庭が両親健在で、しかもその家庭の運氣というのか、それが上昇しているような家庭に目をつけて、その娘、まだ初潮を見ない女の子を選んで、そこに船頭が自ら「フナダマサマを巻いてくれんか」と頼みに行った。ミノガミ（のし紙）の物質なものに、麻のコウゾ（緒）などで作るということだが、私も実際に作る現場を見られない訳だから、だいたい麻の緒で練って頭を作ってミノガミで十二単の様なものを作って、七夕様、お雛様みたいなものを作るらしい。子供の手でも作れる簡単なものという。後で、古い御神体を、どの様なものかなと見たところではそんなものだった。

〈フナダマサマと少女〉フナダマサマを巻く女の子は、必ずしも船主や船頭の子供や親戚でなくても良く、運氣のある家庭の女の子であれば良かった。しかし頼みに行っても、家によっては、うちの子には任せられないと断られる場合もあった。もし、フナダマサマを巻いた船が漁をしないと、その女の子の家が困る訳で、断るケースも沢山あった。ところが、あそこの子が巻くと非常に運が良いとか、漁が良いということになるともう引つ張りだこで、その女の子が沢山の船の神様になるケースもあった。女の子の運が影響を与えるという信仰があつた。そういう家には女の子の姉妹も多くて長女が初潮があつたから、今度は次女だとか、三女をお願いしますとか続いて依頼することが多かった。初潮を迎えると漁はだめになる。初潮を迎えない清浄な女の子でなくてはならなかった。私が船頭の頃には、鯉船には絶対に女を乗せなかった。船にも不漁になるから足を掛けてはいけないという具合だった。たまによそから来た女性が知らないで足を掛けて、怒った船員に塩を撒かれたりした。地元の女性は、そういうしきたりを皆、心得ていて、女性は船には近づかなかつた。妻でも、夫が乗っている船が漁をしなくてはいけないというので、その船には、女性は不浄だという思いで足を掛けなかった。

〈フナダマ込め〉フナダマサマを込める時には船には船大工しか乗れない。船も岸壁に横付けなどしないで、沖に碇をちゃんと入れて、鰻網も入れないで停泊させておく。そこに伝馬船で行き、船には船大工だけが乗船し、他の者は伝馬船で待つ。岸壁に着けると穢れるという意味だろうか、それで鰻網もとらずにアンカー入れて、アンカーでフラセル（停泊する）。フナダマ込めが終わってから、初めて通常通りに岸壁につ

なく。フナダマ込めは、「潮の中道」と言つて満潮になる寸前に行く。満潮にならんとする八合目くらいの時間を選んで込めていた。潮が満ちてくる時間が良いとされ、この時には人形を巻いた女の子は家にいる。その家に、船の船員の内、若い元気な衆が人形をもらいに行く。その子供も家の仏間かなにか一部屋を借りて、部屋を閉め切つて、家族とも話をしないで作つてゐる。事前に打ち合わせておき、でき上がった時間を見計らつて、気の利いた利発な青年を選んで船頭が取りに行かせる。青年はフナダマサマの人形を受け取るとそれをすぐ船まで一直線に持つて行く。その途中では、誰に逢つても、挨拶もしなければ言葉も交わさない、それがしきたりだった。若い衆は前もつて身を清めて綺麗に清潔な着物を着て役割を果たした。その時代の子供達はそういうことを心得ていた。船員自体も「今度は良いフナダマサマを迎えられたよ」ということで意気込みが違つた。今度は大漁するぞという意気込みで、心の拠り所であつた。長老、古老という人が昔は取り仕切つていて、そのように仕込まれて來ているから、実際に信じていた。

第三節 坊津町における〈漁運〉の諸相

〈御神体の入れ替え〉フナダマサマを入れたけども、どうも漁が芳しくない、「漁の良いカゼ（運氣）がこない」という場合は、フナダマサマを入れ替えることもやつていた。そういうことは大っぴらには言わないが、船頭自身がどうも漁が上手く行かないと思つた時には、「フナダマサマを入れ替えてみようか」と考える。そういう時には、他の人には言わない様にする。黙つて船頭が、また別の新しい人にお願ひして入れ替えを行った。私も、実際に入れ替えたことがある。恐らく、皆そういう経験があるのではないか。漁ばかりでなく台風に遭うとか遭難するとか、そのような時にも入れ替える。また船員達も、言わず語らず「フナダマサマを新しく迎えし直したらどうか」と思つてゐる。皆、誰も言わないけれども雰囲気としてある。そういうのを察知したら、船頭は、黙つてやる。下から言わず語らず、以心伝心で行つてゐた。古いフナダマサマは沖に行つた時に、船頭がだれにも気づかれないようにして大海に流す。フナダマサマを巻いた女の子には、航海ごとに漁で獲れた鰯をすぐに心付けとして持つて行つた。大きな、綺麗なものをカミサマイオと呼んでそのようにしてゐた。船頭ではなく、フナダマサマを受け取りに行つた気の利いた若い衆に持たせてやつた。

女の子に初潮が始まると、その家の方から、「もううちの子はだめですよ」と斷りが来る。母親が、そのように連絡をくれた。フナダマサマ

を巻いた経験者はもういないのではないか。皆、主婦になって余所へ出て行っている。フナダマサマを巻くのは、皆気の利いた子だから早く嫁にも行けた。また、フナダマサマを誰に巻かせたかは、皆、秘密にしようとした。あまりそれを公表すると、できるだけ漁は独り占めしたい訳だから、それを聞けば他の船の船頭もあそこの子はやっぱり良かったということで、頼む人が増える。それで、普通は、お互い言わないし、聞かさないのが暗黙の了解だった。

〈サイコロと船大工〉 人形以外に、船頭が用意する御神体は無かったが、船大工はそこで一つよけいなものを加える。柳の木の枝で四角いサイコロを作ってそれを御神体に添えられる。フナダマサマを込めに行くときには南を向いた青々とした精気の良い柳の枝を一本持つて行った。その枝の部分で船大工が鑿と鋸とでサイコロを作る。昔は、船頭の家には必ず柳の枝を植えたものだという。柳というものはどこでもあるものでもないから、私の家でも枝をさしてそれを使っていた。柳は船頭を始める際の必需品だった。「あそこの家には柳の枝があるなあ。あそこには元気のいいのがあるなあ」と目をつけ、フナダマサマを入れる時にもらった。船大工さんは、鑿と鋸とナイフを持つて船に乗ってサイコロを作った。

〈漁盗み〉 他の船からフナダマサマのご神体を盗んで自分の船に移して、運を盗するという話は、話としては聞いたこともある。しかし、自分には実際に見たことはない。カマドの灰を持つて来るというのも聞いたことがある。カマドの灰を自分の船に移すそうで、風土が違う漁師町での話である。漁師町で風習が色々違う。

〈フナタデ〉 フナタデの時には、船体の下に火をつける前にお祝いをする。焼酎、米、塩を備えて、松葉やらで下火をつけて、船体の神様を崇敬するというか、大事な所に手を掛けて下さいという意味の一番大事な儀式であるからお祝いをする。やはり、船のキールが一番大事な部分であるから。それから牡蠣殻を焼き落として、それが一段落したら、晩に酒盛りをしたりする。次の航海が清浄に、言うならば「フナタデで船自体が清浄になったから今度は良か漁があるぞ」という気持ちだった。このような気持ちというのは、船乗りでないと言葉で言ってもなかなかわからない、受け止められない。実際に大海にでると板子一枚下は地獄だと言うけれどもその実感というのは、ことに携わった人でないとなかなかわからない。私たちは、本当に何ヶ月間か沖に出た後、フナタデで船体を陸に上げた時には、本当に自分の体をつ一つ洗って清めるというような、心から頼むよといった思いだった。そのころは木造船で、ちょっとした虫の穴一つで、そこからものすごい圧力で水が入って来る。入り出すとどうしようもないから、そうなる前に頼むよといった気持ちで行った。

「フナダマサマとカシキ」フナダマサマには毎朝、ご飯を炊いたらそのご飯を少しあげて、御神酒を飲むときには飲む前に御神酒を必ずお供えた。それは、日常の行いだった。鰹があがったものを皆が刺身にして食べる時にも三切れくらいは必ずフナダマサマにお供えしてから食べていた。供えるのはカシキが心得てやった。カシキというのは飯炊きで、彼が心得て必ずやっていた。船頭はいちいち指図はしなかった。私が最初に船に乗ったのは、飯炊きとしてではなく、普通の船員として乗った。カシキは年齢が小さい者が勤めた。飯ができあがると、小さいフナダマサマ用の膳を用意して、そこにでき立てのご飯を杓文字で掬って供えた。

「フナダマサンとヘイサミ」全部が全部ではないが、船には必ず古老がいて、時化の前などにはフナダマサマがイサンで鳴くとか言っていた。「イサンで」というのは「勇んで」ということだろうが、「また、今度は時化するぞ」とか、「今度は漁をする（大漁だ）ぞ」とかそういうことを言っていた。しかし、ヘイサミが聞こえる人もいるし、聞こえない人もいる。私どもも、それで聞き分けたという様な経験はあまりない。しかし、そういう古老は、私の船にもいて、「（ヘイサミの聞こえ方の）どこが違うのか」と思うが、「今度は漁がいいぞ」とか知らせてくれて、すると船員も皆、楽しみになって、それが実際に当たることもあった。しかし、「時化風が来る前兆だから用心せにやならんぞ」などと言うこともあった。そこまで私なんかも信じようという気にはならなかったけれども、どの船にもそういう古老はいた。昔の人に聞くと、陸の恵比寿神社の所でも聞こえると言う人がいた。

小括

以上、A氏の語りから、主にフナダマ信仰や〈漁運〉の認識に関わる部分を抜粋した。ここからは、初潮前の少女によるフナダマの御神体の製作により、その少女が有する漁を招く霊的な力を船へと結合させようとする思考がうかがわれる。先に別稿で指摘したごとく、陸に生きる少女の持つ生まれた霊性を獲得し、それによって遠海へと出漁する競合的な漁民集団の中で少しでも多くの漁獲を獲得しようとする漁民気質に関わる可能性がある。

留意されるのは、少女が「巻く」人形にはコウゾや麻の緒を用いるが、少女の毛髪を用いるとは語られなかった点である。坊津町に近い指宿市の聞き書きでは、女性が毛髪をフナダマの御神体として提供していることから、実際には人形にはその少女の毛髪が用いられた可能性もある

が、氏の言葉通りに捉えれば、少女によって巻かれた呪物としての人形を媒介として、毛髪を伴わずとも、その少女の豊漁を招く能力は船へと結合し〈漁運〉を呼び込むとされていたことになる。その結びつきは、少女が人形を媒介として〈漁運〉を船に与え、その見返りとして船から少女へと漁獲を捧げる様に、継続的・循環的なものである。また、特定の船と特定の少女が固定的に一对一の関係で結びつくのではなく、ある一人の少女が複数の船と結びつく場合も見られることになるが、できるだけ漁を独占するためにどの少女に依頼したかは言わないのが暗黙の了解とされていたとの言葉には、〈漁運〉をできるかぎり独占的に獲得しようとする競争的な意識がみられる様に思われる。

少女の選定基準は、船主や船頭との血縁関係ではなく、初潮を迎える前であることを絶対条件として、更に少女の家庭の状況など豊漁を連想させる「運氣」が重視されている。A氏は、例えば船大工が治めるご神体のサイコロを「南を向いた青々とした精気の良い柳の枝」を用いると表現し、また、フナタデを終えた船に乗った船員の気持ちを「フナタデで船自体が清浄になったから今度は良か漁がある」と表現するなどしている。これらの語りからは、漁が単に漁民の技術のみで成り立つと考えられているのではなく、〈漁運〉を想起させる事物や清浄性の認識といった漁民の心のありかたが漁獲にも大きな意味を持つとする考え方を読み取りうる。その認識が同地域のフナダマ信仰にも強く示されていると言えよう。

第二章 熊本県天草市牛深町加世浦のフナダマ信仰―男女児童とフナダンサン―

坊津町の事例では、〈漁運〉は、浦における神聖な少女の霊性にも関わるものとされているが、九州西部においては初潮を迎える前の、より幼い女兒の毛髪に、さらに男児の毛髪をあわせて納める事例が見られる。続いて、牛深町加瀬浦のフナダマ信仰を取り上げる。

第一節 加世浦の鯉漁と出稼ぎ漁

〈鯉漁とザコトリ〉熊本県天草市（旧牛深市）牛深町加世浦は浄土真宗の浦でもある。牛深港は鯉漁で栄えた港であり、牛深漁民自身の鯉一本釣漁への出漁も盛んであったが、その技術修得には十年から十五年はかかるほど熟練が必要であり、漁期も夏場に限られていたために、漁民

の収入は限定されていた。大正期になって鰯漁が興隆し、大正十年位に、鰯の煮干への加工技術が開発されたことにより、牛深漁民の生活水準は著しく向上したとされる。この技術が開発される以前は、鰯は獲りすぎると畑の肥料とする以外になく、また、鰯漁は、鰯漁に比較して人手が必要な割には技術がいらず、鰯漁師からは「ザコトリ」として軽蔑されていた。しかし、煮干に加工する様になってからは、阪神尼ヶ崎方面への販路が開け、蒸汽船による買いつけも行われた。昭和三年生まれの話者がカシキを務めた年代には、発動機船が普及しており、牛深漁民は鰯を追って、対馬沖や、屋久島、十島村方面まで出漁していた。カタクチイワシを獲りながら、三、四日かけて漁場に向かい、それを餌として鰯を釣り上げた。

〈出稼ぎ漁としての飛魚漁と鳥賊漁〉また、遠方の親方に頼まれて、その漁場で漁を請け負う出稼ぎ漁も盛んに行われていた。対馬でのバカイカトリ（イカ漁）と屋久島でのトビウオトリ（飛魚漁）などの出稼ぎ漁がいつ頃始まったかは明らかではない。前者に聞しては、太平洋戦争当時、その召集令状が来た出稼ぎ漁師への連絡の苦労話が聞かれる。和船の時代には、旧盆（旧暦七月十五日）すぎにハエの風（南風）に乗って対馬に向けて出漁し、二ヶ月ほどイカを獲り、季節風がひどくなる前に薪を積んで帰って来たという。トビウオトリに関しては大正七年生まれの話者の友人の父親が八歳で両親を失って身寄りがなかったために、トビウオトリの船のカシキとなって屋久島に渡った話などが聞かれる。以下、その経験談からトビウオトリの状況を記述する。

飛魚を牛深ではアゴとも称するが、屋久島ではトイボと称されていた。種子島にも出漁したが、屋久島が中心であったとされる。和船時代には八十八夜の風を待つて、この風で屋久島へと帆走した。八十八夜には、必ず季節風が吹くため、その夜が近づくと、港には出港準備を整えた和船が二十隻から三十隻も待機し、すぐに出港し、夜明けの五時の出発だと、風が良ければその夜の九時か十時には屋久島の栗生の河口に到着していた。

屋久島では当時、和船での漁櫓は行われておらず、アゴアンブネと呼ばれる、細長い船足の早い小船で漁をした。船には、左右の舷側から虫の足の様にズキが突き出しており、そこに櫓を掛けて漕いだ。アゴアンブネには六名から七名が乗船し、二隻でもやいとなつて漁をする。各船に、一名のイオミ（魚見）が乗り、屋久島の男たちも乗った。また、この時期の飛魚漁には「女子供から、学校の先生、寺の坊主」まで総出だったという。

毎晩、各船輪番で、イオミ（魚見）を一隻出し、河口を中心として、東西の入江のそれぞれを十分見て回る。飛魚は、昼間は沖におり、夜に

は入江に入ってきて、東の空が白み始めるころにホンダワラなど海藻に産卵する。各船のイオミは、ミヨシから身を乗り出して海中を見つめ、シキ（夜光虫）が動くのを見て、それが、飛魚のために動いているのか、虫や海藻のために動いているのかを判断する。飛魚が集まっていると知ると、山アテして位置を憶える。帰ると、東側に飛魚がいれば「トイボ（飛魚）じゃー、東じゃー」、西側にいれば「トイボじゃー、西じゃー」、東西におれば「東じゃ、西じゃ」と叫んで告げる。この時点では、どの入江に飛魚がいるかは告げず、各船がイオミの声を聞いて河口でその方向に向かう地点にイオミは船を出し、各々の船のイオミにどの入江にいるかを教えて行つた。

夜明けになり、飛魚の産卵が始まると、精液で海水が白くなるほどだと言ひ、飛魚は入江から沖に移動を始めるが、この時に漁を始める。各々の船は勝手には網を入れず、船団の内の誰かが「やるぞー」と叫ぶと同時に、一斉にもやいの間に網を落とす。飛魚が集まっているところには、船も集まっているのでなかなか網を広げられず、他の船を竿で押しやりたりして争乱となることもある。飛魚が海中のどの深さにいるかで、網にかかったりからなかつたりするため、イオミが水中眼鏡をつけて海中に入り、飛魚の状態を見て、網の深さを指示する。それでも、ある船は、飛魚が沖に向かうにつれて網が満杯になり、その隣の網には二、三匹しか入らないということが良くあつた。網が満杯になると、イオミは上がって合図をして網を引き上げる。飛魚がいるところにはフカやオボソなどの大魚も集まっているので、網を切られない様に注意する。

水揚げした飛魚は、背開きにして干物にし、白子やマコも塩漬けにしていた。この作業と早朝の漁を並行して行つたため、かなりの重労働であつたという。昭和十三年位には、冷凍船が来る様になつたため、作業は楽になつた。約二ヶ月の漁期が終わると、賃金を受け取つていた。大人の一人前はヨニンマエと称され、女や子供など、「八合、七合（八七割）」の働きの者はサンニンマエとされた。帰りは、ハエに乗つて出港するが、この頃は旧暦の端午の節句の頃でもあり、船で港を出港しかつたところで呼び戻され、団子を土産にもらふことなどもあつた。以上のごとく、加世浦の漁民は、季節的に浦を離れ、遠海での鰹漁や出稼ぎ漁を行う移動性も持っていた。

第二節 フナダンサンと男女児童

（フナダンサンとフナガンサン）加世浦では船に祀られる神霊を、フナダンサンと称す例が最も一般的であつた。船神系統のフナガンサンという名称も、船大工の一人から聞かれたが、漁民の間ではフナダンサンの名称が一般的である。フナガンサンとフナダンサンの間に祭祀形態の

差異は確認できなかった。船大工、漁師ともに、フナダンサンを女性神とする場合と、男女二柱の神とする場合とが聞かれる。後者の例としては、カシキとして鯉船に乗った際に、釜蓋に御飯を二つに分けて供えるのは、男と女のフナダンサン各々に供えるためと教えられたとする話が聞かれる。

〈牛深の船大工とフナダンサン〉牛深港では船大工をフナク（船工）と呼ぶ。その造船技術が大変優れていたもので、木造船の時代には、長崎や宮崎、鹿児島方面からも造船の依頼があつたとされる。調査では、イケダ・クノ・スサノ・フジキ・オガタの屋号を持つ五軒の船大工があつたことを確認できた。この内、オガタは宮崎に、スサノは鹿児島県長島に転出している。フジキは現在の当主の三代前に家大工から船大工になつた家である。先にフナダマ信仰には、造船儀礼においてフナダマを込める「神人化した存在」である船大工が管掌する側面と、船上での生産活動に実際に関わる漁民・船頭が管掌する側面とが見られることを指摘した。牛深港では、造船以外に、中古船購入やマンナオシの際のフナダンサンの入れ替えにも船大工の関与が見られる。フナダンサンの御神体に関しては、船大工がそれを作るが、特に毛髪の準備の段階で、漁民自身がそれを選定している。また、牛深でも船大工はその家業の神として聖徳太子を祀り、元且には床の間に掛け軸を掛けて、鏡餅を供え、曲金、墨壺、木槌を供えるが、船大工の一人は、フナダンサンは七福神の一人であり、そのシショウドン（師匠）が聖徳太子であると話した。

〈フナダンサンの御神体と男女の児童〉フナダンサンの御神体として加世浦で用いられている品物は、髪の毛、サイコロ、銭の三種類である。人形、化粧道具等の品物は確認できなかった。髪の毛は、浦の中で両親が健在の男児と女児（年齢は三歳から五歳）のものをを用い、その毛髪は、必ず別々の家からもらうとする例が多い。ある話者は三才から五才位というこの毛髪提供者の年齢を「色気がない」と表現した。毛髪を提供する児童に関しては、その年齢に該当する児童が船主の家、あるいは船主の親戚にいる場合は、その子供のものをを用いるとする傾向が見られる。例えばある家では、前戸主が造船した際には、丁度その家に女の孫がいたため、その毛髪を用い、その女児が結婚してその夫が造船した際には、子供がいなかったので、妻側の姪の毛髪をもらった。しかし、毛髪提供者と船主との血縁関係は必要条件ではなく、船主やその親戚に子供がいなかったもので船大工の親戚の子供のものをを用いたとする例や、必ずしも血縁者でなくとも、年齢やその児童の両親の状況などが当てはまれば良いとする例も聞かれた。毛髪は、子供の側頭部の毛髪を用いるのが普通であつた。家に子供が生まれ、近々船を新造する予定のある家では、その子供の両側頭部の毛髪を長くのばしたままにしておいた。そのため、浦では、坊主頭でありながら、側頭部の毛髪を幅四センチ、長さ六・七センチに伸ばしたままにしている子供の姿が見られたという。ある船大工の場合は、船降ろしの際にその息子の毛髪を用いることが

度々あったので、尋常小学校に入学するまで、側頭部の毛髪をのばしたままにさせておいた。毛髪は、八の字の輪に丸めて、その交差する部分に横棒を引いた形に結わえるが、これをチョウチョ（蝶々）と称した。話者によってはチョウチョにするのは、男女どちらかの毛髪だけともされる。男女児童の毛髪は、各々を先端が覗く形で和紙に包む。納める際には、穴の奥（トモ方向）に男の毛髪、前（ヘサキ方向）に女の毛髪が来る様に納めていた。

サイコロは、船降ろしの際に船上で船大工が作る。川柳の枝を長方形に削り、その真ん中に切れ目を入れて下部を薄く削り残し、正方形のサイコロがつながった形にする。各々の面には、墨で目を入れてゆく。柳は、かつては船主が山で伐って来ていたが、近年では、船大工の庭に生えている柳を使うことが多い。柳でサイコロを作るのは、その生長の早い様が、大漁に結びつくためとされる。

かつては船主の家で、天保銭を集めておき、月の数の十二枚を赤糸か、紅白のよった糸に通して納める。月の数であるから、閏年には十三枚となる。近年では「漁にご縁がある様に」と五円玉で代用している。銭を納めるのは大きな船だけだったとする話者もいる。

《船降ろしとフナダンサン込め》以上が、フナダンサンの御神体とされるが、これらの品物は、船降ろしの際に船大工によって、船に込められる。加世浦での船降ろしは、夕方の満潮時に行う棟上げとは反対に、朝の満潮時を選んで行う。潮がハチゴウウチ（八合内）位まで満ちて来る九時を選び、完全に満潮になるまでに終えた。船大工はその前日にフナダンサンの御神体を一人で作っておく。帆船の時代には、帆柱を支える太いヅギをフナダンサンヅキと呼び、その下に角材を立てて、ここに縦三寸二分、幅一寸二分の穴をうがつ。フナダンサンを納める穴の大きさはこの寸法に決められていた。また、フナダンサンヅキには檣を用い、必ずサカギ（逆木）にした。「船に三種のサカギあり」という口伝が船大工には伝えられており、ハナギ（へさき）、梶と檣、フナダンサンヅキにはサカギを用いたとされる。船大工の一人は、これは「桝」にあやかっただけではないかと解釈している。機械船の場合は、操舵室に棚を設け、そこにフナダンサンヅキの穴と同じ大きさに作った箱に入れて納めることになる。フナダンサンヅキの前には、一尺の一重ねの鏡餅が、紅白二組と、お膳に山盛りにした塩、そして大工道具の墨壺、曲金、木槌が供えられている。船工はその前で、手早くサイコロを削って目を墨で入れ、前述した髪の毛で作ったチョウチョ、銭を揃え、穴に納めて行き、口の中でフナダンサン込めの祭文を唱え、木槌で二度打って蓋をする。この祭文は船大工によってそれぞれ異なっていたといわれるが、現在、その家に伝えられている祭文は以下のものである。

「かしこくも、かしこき、はらえどの大神、なを萬の大神をはらえ給え清め給えとかしこみかしこみ申す かけまくも、かしこき、佳江の大

神、大海の大神、船玉の大神、八百萬の大神たち平けく安けく、夜の守り、昼の守り、恵み幸ひ給えとかしこみかしこみ申す 先身玉くし守り給え、幸い給え、先身玉くし幸い給え先身玉くし守り給え、幸い給えとかしこみかしこみ申す」

フナダンサン込めが終わると、船主が前に上がり、餅まきをする。この餅には銭が中に包まれている。スエヒロ（扇）の上に五つの餅を置いて、船の東西南北に各々、五つの餅を撒いて行く。和船の場合は餅撒きの後、ジンヌキをする。船を支えている、船のオモテ、トモ各々のジンを抜く。その漁村の古老が、紅白の鉢巻をして船に上がり、長さ五尺、厚さ一寸の板を待つて船上に立つ。船の右舷と左舷には、各々に十五人ほどの男たちが肩を押し当てて待機する。古老は、左右の準備が整ったことを確かめて、「ハレワートーヤ、ハレワートーヤ」と掛け声を掛け、板でトントコトンと三度前を打ち、「二、二の三」と船を男たちが持ち上げ、すかさずオモテの船底のジンを抜き、コロを押し入れる。続いてトモも同様にして、ジンを抜き、コロを押し込む。終わると、「すんだか」と古老は声を男たちに掛け、船がコロの上に安定して置かれているかどうかを確認する。船が安定していれば、古老は「ソロタカ、ソロタカ、ヤルゾー、ヤーガッシャー」と声を掛け、もう一度トントコトンと船を打つと、男たちは、海に船を押して、進水させる。二、三回力を合わせて押せば、船は動くので、古老は、「イマイクゾーヤーエッシガエー」と叫びつつ、板でトントントンと船を打ち続け海面に押し出す。船にはトモに綱が結びつけてあるが、この綱は進水した船が、海面で静かに止まるまで引つ張らない様に気をつける。船が自然に止まると、潮水を掛ける。綱を引いて、船主を乗せると浜に集まった子供たちへ、もう一度、餅撒きをする。この餅には銭は入れてはいない。この後、大漁旗を立てて、逆時計廻りに湾内を廻る。

第三節 加瀬浦における〈漁運〉の諸相

〈妊婦とマン〉 加世浦の漁民も漁撈に関わる様々な側面において、豊漁を導く〈漁運〉を意識することが多かった。例えば、漁師の妻が妊娠して、その夫が働く船が豊漁になった場合には、「わんが（おまえの）かあちゃんがドンバラで、あん子はマンがよか」と仲間に言われることがあった。その船の豊漁が、妊婦の胎内の胎児、あるいは妊娠という状況と関わる〈漁運〉のためだとする事例である。これは、漁船の乗員の妻が妊娠していれば、常に豊漁とされる訳ではなく、反対に不漁となる場合もあるとされ、これは胎児のマンが悪いためとされた。〈漁運〉の現れ方は、顔に個性があるごとく、人によって異なるとする考え方が示されている。

《漂流遺体と豊漁》漂流遺体も豊漁を招く存在とされている。加世浦では漂流遺体はドザエモンと称される。漂流遺体は、死体でありながらも、今だその魂を身体にとどめた存在であると考えられていた。天竜丸という船が難波した時には、船員の遺体が海底に沈んだまま浮かばぬために、漁師仲間が潜って遺体を引き上げることになった。その際に、船で遺体が沈んでいる場所に近づいて、海上から思わず、「え〇〇（名前）じゃっか、〇〇はあがらんかほら」（ああ、〇〇じゃないか、〇〇は船にはあがらないか）と呼び掛けると自分から海面に上がって来た。漂流遺体はこうしたものだという。海中の漂流遺体でも、「フトナノカ、フトナノカ」で一週間に一度は必ず海上に浮かぶものだという。時間がたつて身元が判別しづらい漂流遺体でも、身内の者が対面すれば、必ず鼻血を流すとされる。

水難者の死体は豊漁を導く存在ともされた。漂流遺体に海上で出会った場合には必ず拾い上げる。拾い上げれば漁があるとされる。船に上げる際には、素手では触らず、カマゲで船のオモテに引き上げて包む。漂流遺体を引き上げずにおくと、その船にどこまでもついて来る。ある話者は、以前、マグロが大漁の折りに、漂流遺体に気付いて、「（マグロが）くつとるけん、まっとれ」と呼び掛けて漁を続けていると、船の移動に伴って、漂流遺体もついて来た。「漁の帰りに助ける」と呼び掛けると、そこで待っているものともされる。そうした漂流遺体は引き上げて、人知れず陸に埋めておくが大漁が続くともいう。

黒不浄にあえて関わることも、豊漁を導くとする思考である。遺体を密かに埋葬する行為は、《漁運》を己独りのものとしてワタクシする観念と関わるものと思われるが、こうした観念は、豊漁の他船のカマドの灰を自分の船に密かに移し、その船の《漁運》を盗みとる灰盗みの習俗にも見ることができる。

《灰盗み》《漁運》は、ある船から別の船へと移すことができるものとも考えられていた。鯉船の場合には、マンナオシとして停泊先の漁港で、灰盗みを行うこともあった。昭和三年生まれの話者が、鯉船でカシキをやっていた当時、自分の船が不漁の場合には、他の豊漁の船からカマドの灰を盗んで来る様に言われ、港に停泊していた、その船から灰を盗んで来て、自分の船のカマドに納めたとする話を聞かせてくれた。こうするとマンが不漁の船に移るのだとされる。そのため、豊漁の船では、灰を盗られるのを非常に嫌がり、盗む側でも見つからぬ様に気をつけるのだという。盗むのは、船上の道具類でも良いとする話者もいる。また、船上の生活では、カマドの灰を海中に捨てることは非常に嫌われた。

《マンナオシとフナダンサン》《漁運》との関わりは、フナダンサンそのものにも見られる。不漁の際には、「フナダンサンが眠つとる」な

どと言つて、海水を汲み上げてズキに掛け、フナダンサンの眼を覚させようとした。屋内に祀っているエビスを、フナダンサンと同じく「エビスサンの眠つとる、面を洗つてやる」などと言つて海の中に突つ込む者もいた。何れも、神霊の覚醒が意図された行為と思われ、フナダンサン自体が、その船の豊漁不漁に深く関わる存在とされていたことが示される伝承である。こうした行為を繰り返しても効果が見られない場合は、その船のフナダンサン自体を入れ替える場合もあった。

〈御神体の入れ替え〉 船降ろしで納めたフナダンサンの御神体を入れ替える理由を聞いて見ると、他の土地から中古船を購入してきた場合と、著しい不漁の場合の二例が得られた。中古船を購入した場合には、御神体を浦のフナダンサンのものにする必要があるので、船主が船大工に頼んで入れ替えるとされる。留意されるのは、その中古船が、非常に豊漁に恵まれ続けた船であった場合は、フナダンサンの入れ替えは行わなかった点である。漁のある船は普通、廢船になるまで、売りに出すことはなかったとされる。何らかの事情で手放さなければならなかった場合には、自分と競合することのない様、自分の浦の近くでは売らず、他の土地で売られたものだという。

著しい不漁の際の入れ替えは漁民が船大工に頼むのであるが、その際には漁民は新しい御神体の毛髪提供者として、古い御神体のそれとは別の児童を探した。先の漁民の妻の妊娠と豊不漁を関連させる事例を考え合わせると、毛髪提供者の児童が持つ〈豊漁〉を導く靈性が期待されていたとも考えられる。

〈カマドとフナダンサン〉 先の灰盗みと関連して、フナダンサンの神体そのものを盗むとする例は、今回の調査では確認できなかった。しかし、鰐船においては、カマドはフナダンサンの祭祀とも深く関わる場であった。鰐船では、飯を炊くのは、カシキの役割であったが、カシキは炊いた飯の真ん中を杓文字ですくいとり、そのまま、杓文字を返さない様に気をつけて、裏返した釜蓋に乗せて、それを真ん中から二つに分けて、カマドの脇に置いて、フナダンサンに供えた。フナダンサンノメシと称されるこの供物を二つに分けるのは、男女のフナダンサマに供えるためだと言われていた。この後、カシオケ（飯びつ）へ釜の飯をすべて移し換え、その上にカマドから下げたフナダンサンノメシを乗せて船員に飯をよそつて行く。釜の中には、一粒でも御飯粒を残すものではないとされ、カシキは釜に湯を注ぎ、洗う様にして一粒残らず食べていた。この様に、鰐船では、カマドはフナダンサンに対する供物を行う場所でもあり、豊漁の際には、カマドの横に少しばかりの酒を垂らし、フナダンサンに供えたとした。

第四節 〈イサミ〉・フナタデの伝承とフナダンサンの〈去来〉伝承

〈イサミ〉の伝承 フナダンサンが神秘的な音響をたてるとする〈イサミ〉の伝承も伝えられている。夜、船の中で寝ていると、虫の鳴き声の様な音が聞こえて来る。これを「フナダンサンの鳴くけん、漁のある」などと称した。話者によつては、これを船にまぎれ込んだ虫の鳴き声と説明する。

鯉船でもイサミの伝承は伝えられており、昭和三年生まれのある話者は、鯉船でカシキをやっていた当時、船中で、虫の鳴くような「キーキー」「キリキリキリ」「キッキキッキ」という様な音を聞いたという。この音は船内の全員に聞こえ、「フナダンサンの鳴くけ、御神酒をあげにやあ」と教えられ、船に御神酒をたらしした。このフナダンサンの鳴き声はオモテで聞こえたかと思うと、トモへと移るなど、船中をあちこち移動すると言ひ、必ずしも御神体を納めた場所から聞かれるものとされていない。

〈フナタデの伝承〉〈イサミ〉の伝承は、船中でのフナダンサンの移動の例であるが、フナタデの際に、フナダンサンが船から降り、陸へ上がるとする伝承も瀬戸内、豊後水道、五島、玄海灘を中心に報告されている。加世浦では、船底保護のために、一月に一度はフナタデが行なわれていた。船を浜に引き上げ、ジンギに乗せて、松葉で船底を焼き、その熱が冷めぬ間に、フカの心臓を煮立ててとった油で黒鉛を溶いたものを布につけて、顔が写る位に磨き込む。加世浦では、フナタデの際には、特に儀礼的な所作は行われず、フナタデにおいてフナダンサンが船と陸とを移動するとした〈去来〉の伝承もそれほど明確には聞かれない。加世浦以外の浦の話としてだが、フナタデの前に、「今日はフナタデするけん、ちよっとおりとって下さい」と唱え、終わると「すみました。上がって下さい」と唱えるところ例が聞かれた。注意されるのは宮崎から牛深港に帰港した鯉漁船が、フナタデ前に「フナダンサン、おりなされ」、その後「フナダンサン、のらっしやれ」と唱えていたのを見て、その際に初めて、フナダンサンが陸に上がるとする伝承を知ったとする話者もいることで、この陸との〈去来〉伝承が比較的新しくこの地域に展開した可能性もある。

〈難船とフナダンサン〉ただし、船が時化で難船する際の伝承として、フナダンサンが船から離れ陸へ向かうとする伝承も聞かれる。昭和七年生まれの話者が古老から聞いた話では「和船が難船する時には、波の背に船が打ち上げられて、少しずつばらばらになって行く。この時には助かりたい一心であわてて海中に飛び込むものではない。難船の時にはその船のフナダンサンも船から離れて陸に上られるが、この時にわず

かの間、海が風ぐ。この時に船から離れて、フナダンサンと共に陸に向かうと助かる」とされる。御神体から離れた形でのフナダマ信仰のありがたと、フナダマの陸への指向性が示された一例と言えよう。

《枕箱とフナダンサン》フナダンサンは、また、漁師の枕箱に宿ってその家との間を行き来するとされている。加世浦でも、漁師が漁具（釣道具・網の修理道具・アグリなど）や、煙草・マッチなどの身の回りの品を納め、船中で枕とする木の小箱を枕箱と称する。二股の引き出しがついたもので、指物師に頼んだり、自分で作ったりした。指物師が作った枕箱は大変気密性が高く、難船の際には、これが浮き輪の代わりとなった。後には、カルタと呼ばれる木箱を用いる様になったが、蓋を上からかぶせるもので、枕箱の様な気密性はなかった。漁師は、船を降りる際には必ずこの枕箱を持って降り、正月には床の間に飾り、鏡餅を供えて祀ったとされる。ただし、それがフナダンサンの神霊そのものの（去来）と関わるか否かは、今回の調査では確認できなかった。

《船幽霊とカナアゲ》先の研究ではフナダマは船幽霊など海の「魔」に対して、その力を発揮しない劣位の存在である可能性を論じたが加世浦でも、海の「魔」の出現に際して、フナダンサンに魔よけを祈願するなどの伝承は殆ど確認できなかった。闇夜に灯をともして海上を行く船がおり、仲間の船だと思つて後について行くと、その船が消えて暗礁に乗り上げてしまう。船幽霊の仕業だとされるが、この様な船幽霊の出現に際して、フナダマへの祈願などの行為は聞かれない。

また、船から海中に刃物や碇を落としてしまった場合には、八幡官で、神官に祝詞を唱えてもらうが、これをカナアゲと称している。海中に金物を落とすと必ず不漁になるとされ、特に包丁を落とすと、刃を下にして水面に立つために良くないと言い、カナアゲをして、海の神にオコトワリをする必要があるとされる。カナアゲは、海の神に対するものと考えられているが、その際にはフナダンサンに対しては特別な儀礼は行われず、海の神とフナダンサンとはそれぞれ異なつた性格のものであると考えられている。

小括

以上、牛深町加瀬浦の漁労とフナダマ信仰について報告を行った。ここで、加瀬浦のフナダマ信仰についてその特徴を整理しておく。フナダマの御神体に関しては、男女児童の毛髪が用いられる点が一つの特徴であるが、同様の事例は熊本県天草市、長崎県五島列島にかけて見られ、

種子島からも点在的な報告がなされている。これらの地域でも、毛髪提供者の選定には、必ずしも船主との血縁関係に束縛されず、「両親存命の」あるいは、「家で最も年下の」といった条件を満たす児童が選ばれている例が多い。

不漁の際に、最初に毛髪の提供を受けた男女児童とは別の児童から受けた毛髪を込め直すとする習俗は、毛髪提供者の〈漁運〉が、その船の豊不漁に関わるとする観念に基づくが、そうした観念は、先に〈靈性型〉船靈信仰の例としてあげた鹿児島県坊津町の他、伊豆諸島、三陸沿岸などに顕著に見られる。少女の毛髪に、新たに男児の毛髪を組み入れ、神聖な女性と男性との結合の要素を更に加えていることになるが、これが〈靈性型〉からの派生であるか否かは現在の資料からでは検証は難しく可能性の提示に止めるしかない。漁盗みなどに関わる〈漁運〉の観念は、特に鰯漁が盛んな地域で広く見られるものであり、その点では鰯漁の展開に伴う共通した信仰習俗の広がりが見られる。ただし、高知県土佐など鰯漁業の中心地でありながら〈靈性型〉フナダマ信仰が見られない地域もあり、鰯漁の漁撈技術の展開とともに一元的にこのタイプのフナダマ信仰が伝播したとするには問題が残る。

牛深では冒頭に述べた様に、大正年間の鰯漁の受容と展開が戦前の漁港興隆上の転機となっている。鰯漁の受容はこれよりも早い段階のものであるが、昭和八年当時に鰯船のカシキをしていた話者が語るには、自分が乗船していた船では、フナダマについての祭祀や伝承はなく、船中で飯を炊いても供えることもなかったという。後にカシキを止めて、鰯船に船子として乗る様になった際に、その船の者から、船中で御飯を炊いたら、杓文字で真ん中をすくい、返さずに釜蓋の裏にのせて、中を二つに切ってフナダンサンに供えるものと教えられたという。鰯漁の展開とフナダマ信仰の展開とが関わるとする伝承であるが、信仰習俗の伝承に關しては、地域性を示しながらも各々の船の乗員の経歴によってある程度の開き、言い替えれば船それぞれの個性があったものと思われる。

フナタデにおいて、船と陸との間をフナダマが行き来するとしたフナダマの〈去来〉伝承は、瀬戸内海・豊後水道・五島灘・玄海灘方面を中心として展開する伝承である。フナダマの陸への志向性を示す伝承と考えられるが、加世浦では、それほど明確な形でこの〈去来〉伝承が意識されているとは言えない状況にある。〈去来〉伝承は毛髪提供者の靈性により豊漁を求める観念とは地域を違えて展開する傾向にあり、宮崎からの船よりその習俗を知ったとする話者がいることなどから、これも信仰習俗の展開の問題として留意する必要がある。

また、加瀬浦では、漁夫の妻が妊娠した際に大漁になることをリョウバラというごとく、夫―妻関係に基づき妻の妊娠という状況が、その夫の乗船する船の漁獲に影響を及ぼすとしている。これは、女性の胎内にある胎児の靈性が、その夫の船に豊漁をもたらすとする思考とも考えら

れるが、この思考は、フナダマ信仰とは端的には結びつかず、また別の〈漁運〉を招く条件として考えられている。その一方で、妊婦とフナダマ信仰とが端的に関わる事例も見いだしうる。続いて、福島県いわき市のフナダマ信仰の事例を解説する。

第三章 福島県いわき市久之浜のフナダマ信仰―妊婦とオフナダサマー

福島県いわき市では、特に妊娠した女性の毛髪を御神体の一つとするところにフナダマ信仰の特徴が見られる。本章における話者であるN女史は昭和十三年生まれの女性であり、夫は漁師である。N女史の生家は双葉郡豊岡の農家で、嫁入りは二十一才の時で、夫は二十五才であった。夫の兄弟は第四名妹四名で皆同居しており、その世話も大変な仕事であったという。聞き書きにおいては、漁撈活動における女性の働きについて留意するように努めた。

また、今一人の話者である船大工であるO氏は、昭和二十一年、富岡生れで、昭和三十六年、中学校卒業後船大工の修行に四倉の造船所に入った。そこで五年間修行を行った後、静岡や北海道などタビアルキで修行を続けた。氏は、調査当時、久之浜で造船業を営んでいた。大型のFRP漁船などを造船し、マレーシアやポルトガルにも輸出しているO氏が、久之浜で造船業を始める以前には、地区には二軒の舟大工がいた。

第一節 久之浜の一本釣・延縄・ホッキ貝漁

〈陽気を見る船頭〉N女史の義父は漁師であったが、朝早く起きると沖を眺めて、耳を海に「押つつけて」陽気を見ていた。「ナゴロ（波の種類）が来るかな」など、判断して出航の時間を決めていた。一月から一月に掛けては、延縄のナワブネでカメダコを狙う。それが終わると春先のアイナメ漁に移り、更に夏は鱸を延縄で狙う。かつては夏には鰹の一本釣りで生計を立てていた。浦の男性にはスモグリ（潜水漁）を行う者もいる。磯へ二人乗りの船で出漁し、一人が操船し、一人が潜る。五月から九月までがウニの漁期である。夏にスモグリを行う漁師はその時期景気が良いので、ウニの販売を手伝いに行けばスイカやカツ丼を食べることができると好んで行く者が多かった。

〈ダイボ（大敷網）の進出とマグロのマワリブネ〉久之浜には昭和三十年代の中頃、一時大洋漁業がダイボ（大敷網）敷設で進出し、九州や

四国からヤトイ（雇い）の人々が訪れ浜で生活した。浦には、単身で来たり独身のヤトイの人々が生活するバンヤ（番屋）が二軒設けられ、二段ベッドが設けられた部屋で三十名から五十名もの男達が生活していた。戦後の一時期は百名を超えていた。飯場は久之浜の女性が雇われて賄いを行った。浦の女性はそこで飯炊きを行うと現金収入が得られた。里に妻や子供を残して来た者は、暫く稼ぐと浦に一軒家を借りて、そこに家族を呼び寄せることもあった。また、浦には二軒の銭湯があり、多くの漁師がそこを利用した。大敷網は鰯を狙って敷設したが、昭和四十年頃には殆ど漁獲がなくなり、行われなくなった。昭和五十年頃には、和歌山県からマグロを獲るマワリブネも来ていたという。四〇五艘の船が船団を組んで久之浜に入港していた。マグロ漁に加わった地元漁師もおり、和歌山県に福島県水産事務所代表として講習を受けに行った。この地区では、二月にマグロが沖を北上し、九月から十月あたりに南下するのを狙った。

〈サガリ〉漁船の船員には、乗船する漁船が例え不漁であっても最低保障賃金が支払われるが、かつてはその様な制度はなく、船主からの前借りで生活する船員も多かった。前借りをサガリ（サンガリ）と称する。賃金から返して行くことになるが、生活に追われて中々全額を返すことができない。前借りが終わらないまま、他の船主の船に移る場合は、「あの人はサガリがある」とされる。次にその船員を雇った船主が、サガリの肩代わりをして一度精算し、新たな船主に最初から前借りができてしまうことになり、中々、借金を返済できない状態が続いた。漁師は自然を相手にしている商売であるから、今日大漁であっても潮の加減で翌日には不漁になることも多い。これを「浜の明日なし」、「柳の下に泥鰌なし」と表現する言い方も伝えられている。現在は最低保証賃金の制度で船主と船員との関係は安定している。しかし漁業従事を志す後継者は不足している。漁業は収入が安定しないことや、魚がおらず水揚げが減っていることも問題となっている。七月と八月は資源の保護のため底曳網の休漁期間としている。

〈ホッキ漁〉この休漁期間に話者の家が試みていた漁業は、夏のホッキ貝漁であった。昭和三十年頃、和船に四〇五名程乗船し、手でマンノウと呼ばれる熊手状の器具を曳いてホッキ貝を獲るホッキ漁が行われたが、その後漁獲の減少から昭和四十年に休止した。十数年前に福島県の水産試験場が県内の水産資源の調査を行い、その協力を県下の漁民に実費支給で求めた。話者の夫は、ホッキ漁の経験があり、どの磯にホッキが増えていくかを知っていたので、夏の漁期に間に合う様、二ヶ月程で認められる組合を通じたホッキ漁の仮免許を申請して認められ、漁を試みたところ毎日大漁が続き、直ぐに二十五艘の船がホッキ漁に出漁する様になった。マンノウの底引きを夏に連続して行うと資源が枯渇する恐れがあるため、九月に漁を行っていた。各船の一日二回の水揚げを一旦組合で集め、ペログイ（ペロを貝殻が挟んでしまつて売り物にならない

もの)などを女性が仕分けして仲買に売る。一時は、自分の家の船が獲って来たものは、その家の家族で仕分けしていたが、少しでも収入を増やそうとベログイをわざと混ぜて組合に渡す家が出て久之浜の出荷品全体の評価が下がったため、共同作業に切り替えた。一艘の船で、一番と二番の漁を合わせて百五十kg以上は獲ってはならないのだが、一日二百kg獲って、その内五十kgを磯に隠しておいて、翌日の出荷に混ぜる家があり、鮮度が落ちたホッキ貝に仲買からクレームがついたことがあった。その様なごまかしを防ぐ意味からも、分別作業は共同で行い、入札された金額を均等割で分配することにした。日によっては百五十kgに満たない漁の船もあり、必ずしも各々の船の労力が報われる訳ではないが、ホッキ漁を行う漁師達は浜から出荷するホッキ貝の品質を維持するためにはこの分配方法を最良のものと考えていた。道具は、共同購入のものだと扱いが雑になってしまったため、個人購入・個人所有で揃えていた。

第二節 漁撈と妻の役割

〈主婦の役割〉漁家における主婦の役割は、その出航の時間に合わせて釜で炊いたご飯をお櫃に詰めて持たせることであった。一艘の船に三名から四名が乗船していたので、その人数分の食事が必要であった。夜の一時に出航するのであれば、十二時には炊き終わって一時間は蒸らし、人数分の食器を揃えて、船の燃料である重油を運びリヤカーと一緒に乗せて運んだ。三十艘程の船が同時に出漁し、三時間から四時間ほど漁をして帰港し水揚げした。それを手伝うのも女性の役目であった。当時は無線も無かったため、何時夫の船が帰港するか正確にはわからなかった。底引きの状態で帰港時間も異なるので、だいたいの時間を予想して早めに浜へ出て船を待った。

船から受け取った魚を種類別に別ける作業をカゴウケと称する。数百匹の魚を種類別に分けて行く作業は大変な労働であった。話者の場合、カゴウケは姑と一緒にいったが、出産直前や産後間もなく赤子を負ぶってこの作業を行うのは大変だった。これが終わると一時間ほど仮眠を取り、午前六時には子供を学校に行かせるために起きて朝食を作らなくてはならなかった。妻は旦那(夫)の動きに合わせて行動するのがかつては当然とされた。

無線が船に装備されるようになった後は、帰港直前に港で待つことが出来る様になった。現在では、出航に際して飯を炊くのは男性であり、ガス釜まで船に装備されている。獲った魚を刺身とするが、妻が用意したおかずも食べる。現在は、夕方出航し、船に一泊することも多い。

市場に魚を運び、それを売るのも女性の役割であった。仲買のことをカイニンと称する。船が入港すると、カイニンは朝八時から一時間ほどの競りに参加する。元はカイニンは特定の船と「ツーツーベッター」の関係である場合が多く、その船に水揚げがあつたら特定のカイニンに直接卸すことが多かった。二〇〇四年の三月までは市場では競りの形式で魚を取引していたが、競りの形式だと、カイニン同士で談合めいた取引を行うこともあり、例えば三十kgもの魚は要らないがその単位で入札が行われる場合、何人かのカイニンが談合して、「競り落としたらオメエにも分けてやるから」と、価格を合わせる事が横行した。この為、魚の値が上がらず、浜の漁師が不満を持ったため、他の浜のやり方を見て入札制に変えた。入札制であれば、他の者が幾らで入札したかはその場では判りにくいので談合はやりにくいという。

家庭においては財布の管理を主婦が行った。農村では男性が行うが、「船の人」(漁師)の家では女性が財布の管理を行う。話者が嫁入りした際には、姑が財布を管理していた。財布を嫁に渡すのは、姑が在る程度老齢に近づき、カゴウケや家事など嫁の様子を見て、もう大丈夫と見極めてのことであつた。話者が財布を姑から受け取つたのは五十才前後であり、息子の嫁に財布を渡したのは六十才前後である。財布を渡した後には「年寄株」と称して小遣いをもらう。

〈女性の関わる行事〉久之浜の氏神である諏訪神社の大祭はかつては旧暦の四月八日と九月とに行われており、調査当時は新暦の四月八日に行われた。御輿が出され半日の間、門前地区を除く町内を練り歩く。門前が加わらない理由は、以前、御輿を出した年に流行病が流行してしまつた為とされる。前年の大祭から今年の大祭までに子供を産んだ漁師の家の嫁が、子供を負ふて共をして歩く。紅白のウブヒモに賽銭を入れた鬘斗袋を掛け御輿に下げたり、紅白の餅を自宅で搗いて持つて歩く者が、賽銭を下げた人に餅をわたす。これらは漁師の行事であり、在の人(農家)では行わない。また、漁師の家では、春恵比須と秋恵比須の二回、恵比須講を行うが、これらの供物も全て家の女性が供えるものとされる。春恵比須は、これを機会として恵比須様が働きに行くので、魚を床の間か神棚に供える。秋恵比須は働きに出た恵比須様が帰つて来るので、船で獲れた大きな魚を尾頭付きの煮魚としたものと、井に生かした小さな川エビ、白御飯、大根鱈とを床の間か神棚に供えた。また、漁師の漁獲と卸値などを集計する為の仕切帳を升に入れて供えた。

第三節 オフナダサマと妊婦

（船大工の語るオフナダサマの御神体と妊婦）フナダマはオフナダサマと称される。オフナダサマの御神体は、ケヤキを彫って作った小さな箱に納めた、人形、サイコロ二個、妊婦の毛髪、銭十二文である。この内、サイコロと人形は四倉諏訪神社から船主が受けて来たものである。

ケヤキの箱は、人形が丁度納まる大きさ深さに穴を彫り、そこに障子紙で包んだ御神体を納め、きちんと木の蓋をする。これを市販の神棚の中に納め、操舵室か機関室に祀る。

人形は、紙を折って作ったもので、オヒメサマとオトノサマとを腹合わせにしたものである。これを離れないように妊婦の毛髪で結ぶ。かつては諏訪神社で受けるのではなく、妊婦が和紙を折って作っていた。妊婦の毛髪は五、六本ほど長いものを頭に残してもらい、それをもらって来る。自分の妻の毛髪でも良いが、三代の夫婦が揃った家の「腹が大きな」嫁に人形を折ってもらい、その毛髪をもらって人形に巻くのが最も大漁を招くとされる。オフナダサマに用いる毛髪は、船主の妻が妊娠している場合はその毛髪を用いる。そうでない場合には、夫が漁師ではない妊婦に頼んで毛髪をもらう。漁師の妻以外からもらうのは、夫が漁師であれば、その妻の毛髪を奪うことになってしまうからである。同じ妊婦の毛髪を二艘の新造船に籠めることはない。また、夫婦で乗船して操業を行うメオトブネの場合にはオフナダサマに妊婦の毛髪は入れない。これは女性が舟に乗るため、オフナダサマがヤキモチをやくからだとされる。サイコロは天の方向に一、地の方向に六、ミヨシ（船首）の方向に三が来るようにあわせる。「天一地六オモテ見合わせトモ幸せ・・・」と唱える。一の目は天の星を示すのではないだろうかと話者は考えている。サイコロの目あわせは船主が行う。銭十二文は、今は百円玉を使う。大潮の海水を汲み上げ、洗って用いる。御神体を船に籠めるのは、進水式当日の朝で、満潮時を選ぶ。船主が用意した品物を棟梁が納める。

廃船の時には、オフナダサマを外して、正月の七日に行われる左義長の際に燃やす。中古船を購入した場合、古いオフナダサマは外して、新しいものに入れ替えるが、その船が大漁続きだった場合には、そのままにしておくこともある。また、新造船に以前自分が使っていた古い船のオフナダサマを遷す場合もある。これも前の船が大漁続きだった場合に限られる。不漁の際にオフナダサマを取り替えることもある。話者が親方の下で修業していた当時、北洋で鮭漁を行っていた百トunkラスの船が不漁続きのため、オフナダサマの取り替えを依頼して来たことがあった。一度大漁の船に当たった漁師は、次の船の造船も、同じ船大工に依頼してくる。

〈造船の過程とフナオロシ〉船材とする樹種は、桤、樺、杉で、桤や樺は骨組みに、杉は外板に用いる。桜の木は、「ぱっと咲いて、ぱっと散る」ので、船に用いるのは嫌われる。また、寺院や神社境内の樹木や、謂われのある大木も船材としては嫌われるが、神社の樹木は良いとする船主もいる。まずシキズエの祝いを行う。神主を招き、船台の前に青竹を二本立てて注連縄を渡し、餅、塩、鰹節、御神酒を供え、オモチ、ナカ、トモの三箇所御神酒を掛ける。シキズエの後、造船作業に入るが、キールとミヨシを立て、マツラ（骨組み）を組み付け、外板を貼って行く。一艘の木造船に二ヶ月は必要とする。造船の後、喫水線まで水を注ぎ、漏れを確認する。漏れている場所にはマキハダ（大鋸屑）を打ち込みパテを盛って浸水を防ぐ。フナオロシは船大工の棟梁を中心に進められる。満潮時に、良い船であるように棟梁が願い、オフナダサマを込める。

〈漁家の語るオフナダサマ〉それでは、漁家においてはオフナダサマはどの様に認識されているであろうか。ここでは、N女史の婚家の例を紹介する。同家では、床の間に船玉大明神と記された掛け軸と熊野権現本宮との掛け軸を掛け、祀っている。話者の家の船の船名は稲荷丸であり、屋敷神としても家の裏手に木製小祠を設け稲荷を祀っている。話者の夫の父は明治終わり頃の生まれでカミマイリ（神社仏閣への参詣や、宗教者への相談）を好まない人であったが、大漁に恵まれた。その先代は明治初年頃の生まれでカミマイリを好む人であった。現在の話者の家は、昭和五十五年の台風による高潮被害の際に、古い宅地が浸水したため、現在の高台に新築したものである。その際、ある祈祷系寺院の僧侶に家のお祓いを行ってもらった所、座敷に置かれた大きな鎧甲の場所が悪く家運を落としていることを指摘され、骨董屋に売ることを勧められたため、それに従った。またこの時に、僧侶から家の中に神様がおられると告げられたが、思い当たる節もなく、カミマイリもしなかったが、ある時、物置に入れた荷物から明治時代の掛軸が出て来た。それが船玉大明神と熊野本宮の掛軸で、恐らくは信心深かった先々代の当主が受けたものであると、それを床の間に掛け、熊野本宮にも参拝した。同時に家で所有する船の船名を熊野丸とし、旧暦一月一四日に熊野本宮で行われる船玉様のお祭りに二泊三日で参加する様になっている。

〈オフナダサマの御神体と妊婦〉話者は農家の出身でもあり、オフナダサマの御神体のことを嫁入り後も良く知らなかった。十二月のススハギ（煤払い）で家の掃除を行っていると木の固まりが出て来た。その中に色紙で作った人形や毛髪などが入っているのを何だろうとバラバラに引き出している所を姑に見つかり、「これはオフナダサマだ」と酷く叱られ、オフナダサマについて知るようになった。オフナダサマに用いる毛髪は、妊娠した女性の毛髪であり、気の弱い者よりも、気がきかん（荒い）位の妊婦の毛髪が好まれた。気がきかん妊婦の毛髪をオフナダサ

マとして込めると大漁となるとされており、「あの家の嫁は気がきかんが、嫁を貰って大漁になった。うちもそういう嫁をもらい直すか」など冗談で言う漁師もいる。不漁があまりに続く時には毛髪を別の妊婦のものへと入れ替えることもある。

オフナダサマに毛髪を提供する妊婦は船主の身内でなくても良い。四倉の諏訪神社でオフナダサマの御神体のセットが最近では売られており、それを利用する船主も多い。船玉籠めは船主と船大工で満潮の夜中の二時頃を選んで行く。大工の棟梁が一人で込めることもあれば、神主を依頼する場合もある。神主を呼ぶ場合でもオフナダサマを船に込めるのは棟梁の役割である。

第四節 久之浜における〈漁運〉の諸相

〈女性と船〉女性が妊娠すると、その夫の乗る船は極端に漁がある場合と、反対に全く漁が無い場合とに分かれることが多いとされる。これは家によって異なるとされ、漁師によっても「子供ができた（妊娠した）から今は漁がある」などと言う者もいる。出産そのものは不漁になると嫌われることが多く、出産があった家で三日間は「血が動く」から、その期間は漁に出られないという。どうしても漁に出る場合には、隣の家を訪ねてそこから出漁した。また、女性は船のとも綱や道具を跨いではならないとされる。話者はこれを姑から教えられた。また、出航の時刻に家の中を掃除したりしてゴミを家の外に掃き出すことも嫌がられる。話者は姑に教えられて、船が完全に港を出てしまってから家の掃除をする様に心がけていた。また、出航の時間には、家の中で大きな声を上げたり、子供が喧嘩をして大声で騒いだり泣いたりすることも嫌がられた。

〈ドザエモン〉海上でドザエモン（漂流遺体）に出会った時には、それを出漁中だからとその場に置いて行くと良いことはないと言われる。必ず持ち帰り警察に届け出る。ドザエモンは七日七日で浮かび上がるとされる。ドザエモンを船に乗せた後は、神主を呼んでお祓いするが、乗せるとその船は豊漁になるとされる。

〈ナマキリ〉現在、一月八日がデゾメとされるが、久之浜ではデゾメで一番最初に港を出る船になることを嫌う。かつては一月五日にデゾメを行ったが、一番最初に港を出た船が連続して事故を起こし、日を変えた。どの船も最初に港を出ることを嫌うので、昔漁師を行っていて今は引退している老人などに頼んで、最初に港を出て貰う。これをナマキリと称する。老人には謝礼をわたした。港を出た船団は、四倉の諏訪神社

に向かい、海に面した神社の前で三回船を回す。話者の祖父の代には津ノ森明神に参詣し、その前で船を三回回していた。昔は、「地獄の釜が開く」一月十六日までは、寒く時化も多いので漁に出ることもまずなかったが、現在は一月八日のナマキリの後に天候の良い日を選んで漁を行っている。

〈トシトリモチ〉十二月二十八日には餅を搗いて、三十日に家の中の神仏や船にトシトリモチを飾る。二十九日はクノモチ（苦の餅）で餅を搗くものではないとされ、三十一日に餅を供えることは一夜飾りになるので嫌われる。煮染め、白御飯、刺身、大根の酢の物と共に機関室や操舵室に飾る。家や船の飾りを下げるのは一月八日で、この日にオショウガツサマを送る。次に述べるデゾメに出る前に、正月飾りや船飾りを橋の下に集めて、燃やして処分する。この時にはかつては「ほーいほいほい」と掛け声を掛けた。

小括

いわき市久之浜のフナダマの御神体で特徴的であるのは妊婦の毛髪である。漁民自身が説明する様に、それは豊漁を招く呪物として用いられている。この点では、初潮前の少女の毛髪やその制作する人形を用いる事例と共通する要素を示す。久之浜で用いられる毛髪は、妊婦の毛髪であるが、必ずしも漁船の所有者である船主の妻や、漁船に乗船し漁を指揮する船頭の妻の毛髪とはされていない。漁民社会においては、夫と妻との関係は一つの漁家を支えて行く上で極めて重要である。そのことから言えば、例えば熊野灘や三浦半島、対馬などの漁民に見られる夫が乗る船にその妻の毛髪をフナダマとして込める行為は、妻の霊的な力がその夫を庇護するとの考えに基づくものとして理解できる。しかし久之浜の場合は、船に籠められるのは妻の毛髪でなくとも良く、むしろその妊婦の毛髪が豊漁を招き得るか否かが問題とされている。そこには妊娠した状態の女性が有するとされる豊漁を招く力に対する思考が示されている。また、一人の妊婦は複数の船には毛髪を提供しないともされ、久之浜の漁民にとって、豊漁を船に招く〈漁運〉は、個々の船に毛髪を通して独占されるべきものとの意識もかいま見られる。女性に豊漁を招く呪力を期待する点では、初潮前の少女にそれを求める〈霊性〉型フナダマ信仰と共通するが、こちらは、生殖能力のある女性がその胎内に新たな生命を宿している状態が豊漁に結びつくと思われている。

同様の事例は、久之浜から五十kmほど南に位置する茨城県北茨城市大津港でも聞かれる。大津港は、施網漁撈の他、かつては北洋船など遠海

への漁業基地としても非常に栄えた浦であるが、ここでも、妊娠期間中に漁師にフナダマの御神体として毛髪の提供を求められたとする体験を聞くことができる。大津港の場合、毛髪の提供者は、もし妻が妊娠していれば妻の毛髪を込めることになるが、必ずしも妻の毛髪である必要は無かったとされる。不漁の時には「フナダマサマをとつけーちゃうかな（フナダマサマを取り替えてしまおうか）」などと冗談で言うことはあったが、実際に取り替えた例は確認できていない。妊婦は産婆（助産婦）の紹介で探すことが多く、船が大漁続きの場合には、その船の毛髪を新造船に引き継ぐこともあったという。

大津港では、夫―妻関係に関わる大漁祈願の方法として、夫達の出漁に際して船問屋の女主人が関係する水主達の妻と共に、氏神社の佐波波地祇神社や村内小社を順に参拝し、最後に宴会を行う「三日間の御信心」がかつて行われていた。この豊漁・安全祈願は妊娠やフナダマ信仰に関わるものではなく、夫―妻関係に基づく共同祈願行為であると言える¹⁰。

今ひとつ、関係する事例として、大津港から岬を挟んで1km程に位置する北茨城市平潟町の船大工からの聞き書きを紹介する。平潟は、久之浜にもほど近い漁村であり、天然の良港であることから藩政期には千石船の寄港地ともなり、非常に栄えた土地である。現在、小型船によるアンコウなどの底引き網漁が行われているが、かつては大型定置網も地先に敷設され非常に潤った。話者は、平潟で、昭和三十年代半ばまで木造船の造船を行っていた。平潟では、フナダマの御神体として、妊婦の毛髪、男女の人形、「天一地六 面舵につこり 取舵ごっそり（上が一、下が六、面舵方向に二、取舵方向に五）」の形に合わせた二個の養子、五穀、銭十二枚（閏年は十三枚）を船長室の神棚などに船大工が納める。この内の毛髪は、妊娠している女性の毛髪を用いるが、それは妊婦の毛髪を込めると大漁になるからだとされる。妊婦は、妊娠三ヶ月位の女性で、特に寅年の女性が良いとされ、船主が産婆（助産婦）などを頼んで探すが、なかなか条件に合う妊婦が見つからない場合も多く、妊娠後期の女性の毛髪を込める事も多かったという。

漁家の女性が妊娠した場合、その夫の船が大漁になる場合があることは、加世浦の例もそうであるが、論者の調査経験では、大敷網漁業の発祥の地とされる山口県下関市湯玉浦や有明海での帆引き船による漁業を行う熊本県熊本市河内町などでも聞かれるものであり、久之浜に限られた伝承ではない。山口県下関市湯玉浦の場合は、漁民の妻が妊娠して大漁となった場合それをリョウバラとして妊娠期間が長く続くことを期待するが、反対に不良になった場合には早く生ませようとするとされ、妊婦の個性により大漁に振れるか不漁に振れるかの差があるものとされていた。これらの関係も、基本的に夫―妻関係に基づくものである¹¹。

久之浜や大津港、あるいは平潟でも、妊娠という状態が豊漁につながると認識されているが、注意されるのは、それが、必ずしも夫―妻関係に限定されるものではなく、毛髪の提供を通じてその関係以外の漁船にも影響を与えうるという思考が見られることである。

例えば、平潟では、船主の妻が妊娠している場合もその毛髪を込めることは避けることが多かったとの話が聞かれた。もし、妻の毛髪を込めて、漁が無かった場合、自分の妻が「チョーロクでもなかった（豊漁を招けず、ろくでもない）」と言われかねないためだという。他人の妻の毛髪であれば、漁が無い時には、「アヤが悪い」から他の妊婦に入れ替えることもできるからだとされる。話者である船大工は実際に二回、毛髪の入替えを行い、古い毛髪はフルハチマンと呼ばれる氏神社旧境内社殿の縁の下に投げ入れている。毛髪を提供する女性がその時妊娠していればよく、一回毛髪をもらえば、その後はその女性が出産しても入れ替えることはなく、入れ替えを考えるのは「アヤが悪」く不漁や不運が続く時であるという。話者の表現では、妊婦との関係は、毛髪を提供してもらった際に心付け位は渡すが、「もらえば終わり」の関係で、生まれてもかまわないものとされた。

おわりに―フナダマ信仰に見る〈漁運〉の意識―

以上、鹿児島県南さつま市坊津町、熊本県天草市牛深町加瀬浦、福島県いわき市久之浜におけるフナダマ信仰についての報告を行い、そこに現れる〈漁運〉の観念を中心として若干の分析を試みた。基本的には、フナダマに関わる事象の文献からの事例集積・比較研究と類型化作業で得られた地域的特徴と類似する形を各地域において見いだすことができたと言える。

フナダマに納められる毛髪や人形についても、その選定に際して、遠海での競合的な漁労活動を行う漁民は、特に〈漁運〉との繋がりを重視する。〈漁運〉を招く目的で、陸にある霊的な力を有する存在、それは、ある場合は浦に於ける神聖な少女であり、またある場合は、妊婦とその胎内で育まれる胎児であるが、その毛髪の一部、あるいはその存在が作成した人形をフナダマの御神体として選択し、自らの船の豊漁を期待する。

初潮前の少女の毛髪をフナダマの御神体として用いる例では、船は海上にあってもフナダマの御神体の毛髪や制作に関わった人形を通して陸

の生ける女性と結びついていると考えられている。これは、その少女が初潮を迎え、フナダマへの毛髪提供者・人形制作者としての条件から外れた時に、船からその毛髪や人形を取り出し、別の初潮前の少女のものに変える行為にも示されている。

対して、久之浜では、妊婦が出産したため御神体の毛髪を入れ替えたとする例は聞かれなかった。もし陸の妊婦と漁船との継続的・循環的な結びつきが豊漁を招くと考えられているのであれば、その妊婦が出産し、妊婦でなくなった時点で豊漁を招く毛髪の力は失われてしまう。それにも関わらずその時点でも御神体の入れ替えを行わないということは、妊婦の毛髪を一度御神体として込めれば、陸の女性の状態とは関わらず豊漁を招く力は常に毛髪に維持されていると考えられることになる。

フナダマ信仰には、常に陸で生活する毛髪提供者の女性の力とフナダマの力が結びついており、陸の女性の状況が船にも〈漁運〉にも影響を与える意識されるタイプと、一度、〈漁運〉に結びつく属性を帯びた女性の力を船に結びつけばその力は恒常的に船にあり、陸の女性の状態の変化には大きな影響を受けないとするタイプが見られることになる。

漁民の〈漁運〉に対する意識は、もちろんフナダマのみに現れるものではない。本稿でも報告したごとく、夫と妻の関係性の中に基づいて妻の妊娠が豊漁・不漁に結びつくとする思考や、漂流遺体を拾い上げ身内以外の他者の穢れにあえて関わることに、均衡し安定した状態を崩し、豊漁に向かうリズムに乗せて行こうとする思考、あるいは、マンナオシにより船という空間そのものを更新しようとする思考など、それは様々な形で示される。漁民の〈漁運〉に対する意識は、海という人が統御できない自然の領域で行われる漁業という生業の偶有性にも関わるものとも思われる。

註

一) 筑波大学歴史・人類学系紀要『歴史人類』第二二号 一九九三年 八一―一八五頁。

二) 鰹漁など遠洋出漁を行う釣・縄漁漁民集団、地先海域での網漁を中心とした網漁民集団、海女など潜水漁を行う特殊漁民集団の三類型。
高桑守史『日本漁民社会論考 民俗学的研究』未來社一九九四年。

三) 徳丸亞木「陸と遠海における海への心性」増尾伸一郎・工藤健一・北條勝貴編『環境と心性の文化史 環境の認識』上 勉強出版

二〇〇三年二六六―二八四頁。競合的な漁民社会における〈漁運〉の観念に関しては、高桑守史「沿岸漁村の変化と漁民社会の特質」(『日本の沿岸文化』一九九〇年所収)、および、徳丸 註一) 論文参照。

四) 徳丸亞木「第二部 浦に生きる V リョウドの人生」山口県編『山口県史 資料編 民俗二 暮らしと環境』山口県、三九七―四二八頁、二〇〇六年。

五) 高桑守史『日本漁民社会論考―民俗学的考察―』一九九四年。

六) 男女児童の毛髪を別の家から求めるとする点には、男女児童の「神婚」において、近親婚を避ける意図が込められているのではないかとも思われる。船霊信仰に纏わる「神婚」の観念に関しては、神野善治「船霊と樹霊」(『沼津市博物館紀要』一〇 一九八六年)、および同「家屋の神と木魂」(『新賞の研究』三 一九八八年) 参照。

七) この地域に限らず、全国的に見て「天一地六」の符丁で、六の面が下、一の面が上になるように二つのサイコロを合わせて納めるのが一般的であるが、今回の調査では目の入れ方は確認できなかった。

八) 宮古市伊良部島においては、初潮前の少女の毛髪を御神体とするフナダマ信仰が南西諸島の中で例外的に見られる地域であるが、これは鰹漁技術と本土型の船の移入に伴い受け入れられたものの様に思われる(伊良部村『伊良部村史』一九七八年 七三五頁。伊豆諸島と鹿児島との間も、鰹漁と造船技術における関連が先に指摘されており、豊漁を導く個人の靈性を毛髪を通して船に込めるとする観念も、鰹漁に関わる造船技術の展開に伴って九州西岸に定着した可能性が考えられるが、この点も検証が必要である)。

九) 船問屋の役割は、大津港に入港した漁船に対して、漁労や船上の生活に必要な様々な資材を提供するとともに、大津港から出漁する漁船に水主(乗組員)を手配したり、あるいは出漁先の船問屋とも協力して水揚げの流通を行うことにあった。大津港のある船問屋の経営は、その家の姑が行っていたが、その家の話者によれば、男は出漁で陸の仕事に専念することができないため、船問屋の経営は女性が行っていたものと説明された。

十) 妻の妊娠が夫に影響を与えるとする思考は、狩猟においても見られる。例えば、宮崎県児湯郡西米良村では、妻が妊娠している期間、「猟がきく(猟がある)」者と、「猟がきかん(猟がない)」者とに分かれるとされる。仕留めた猪がなかなか死なないことがあり、その時には猪の流した血をねぶる(嘗める)と、直ぐに死ぬとされる(徳丸亞木「村所民俗記―宮崎県児湯郡西米良村の生活と伝承―」『歴史人類』

本稿の第一章の資料は、一九九八年の調査による「鯉漁船頭経験者の生活史―鹿児島県川辺郡坊津町」高松敬吉編『東日本・西日本漁村における漁民信仰伝承研究の比較民俗学的研究』（文部省科学研究費補助金 基盤研究B）一九九九年に基づく。第二章の資料は一九八六年三月の調査による「牛深市加世浦のフナダマ信仰」高桑守編『北九州漁民社会の民俗形成―豊後水道・玄界灘を中心として』（文部省科学研究費補助金 基盤研究C）一九九四年に基づく。第三章は『漁民信仰の民俗学的研究―フナダマ信仰を中心として』（文部省科学研究費補助金 基盤研究C）による二〇〇六年の調査資料に基づく。大津港の事例は二〇一二年、平潟町の事例は二〇一三年の自身の調査に基づく。